Aクラスの本を読む　その3

ウィトゲンシュタイン

『哲学探究』入門

中村　昇

教育評論社、2014年

写真はamazon

本を読む機会は少なくないつもりだが、ほんとうに面白い本は年に10冊もあればいいところで、厳選して読んでも、その確率はおそらく数十冊に一冊といったところだろう。

そうしたAクラスの本もこれまでは読んで終わりだったが、それでは勿体ないと考え、自分の心覚えも兼ねて、簡単にご紹介していこうと思います。

ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン（1889‐1951）は、オーストリアのウィーンに生まれ、主にイギリスのケンブリッジ大学で活躍した哲学者で、後の言語哲学、分析哲学に強い影響を与えました。代表作としては、前期の『論理哲学論考』と後期の『哲学探究』があげられるでしょう。このうち『論理哲学論考』に含まれる「語り得ぬものについては沈黙しなければならない」という命題は、本来の哲学的意味を離れ、一種の箴言として広く流布します。

ウィトゲンシュタインに対する関心の持ち方には2種類あって、一つはその哲学的内容に対する関心であり、もう一つはウィトゲンシュタインという人間、その生き方に対する関心です。もちろん中心となるのは前者の哲学的内容なのですが、後者の人間・生き方に対しても強い関心を持たれる、それがウィトゲンシュタインの特徴であると思います。ウィトゲンシュタインは、相当のカリスマ性を持った人物だったようです。なお、ウィトゲンシュタインの評伝としては、ノーマン・マルコムの『ウィトゲンシュタイン―天才哲学者の思い出』が手頃で読みやすく、より詳しくはレイ・モンクの『ウィトゲンシュタイン―天才の責務』（2巻本の大著で読むだけで大変だが、ラッセルとの関係などは面白い）がいいと思います。

本書は、前者の関心から書かれたものですが、後者の関心についてもColumnで触れられています。『ウィトゲンシュタイン―天才哲学者の思い出』からの引用ですが、たとえば、ウィトゲンシュタインの講義は下準備もノートの類もなしに行われたこと（pp69）、また講義中であってもウィトゲンシュタインが思索に集中してしまうことがあったこと（pp74）などが紹介されています。印象深かったのは、ウィトゲンシュタインは、議論する相手の

考えていることをいい当てる異常な才能をもっていたが、これは彼自身がその問題を解決するために、すでに何百回となく相手の考えている地点を通ったことがあるからだという指摘です（pp72-73）。著者は、ウィトゲンシュタインは、本や論文を書くときだけ哲学するただの哲学研究者ではなく、日常的にいつも考え続けることのできた真の哲学者であったといいます（pp69-70）。

さて、『哲学探究』（1953）は、全体で 693 の節から構成されていますが、本書「ウィトゲンシュタイン『哲学探究』入門」では、このうち概ね 1-40 節、65-71 節、243-258 節について読み解かれています。『哲学探究』全体の 1 割弱ですが、中途半端な感じはまったくなく、これはこれで完結しています。基本的には『哲学探究』を 1 節ずつ読み解いていくという形をとっているので、『哲学探究』の内容が大雑把に要約的に分かるのではなく、細部まで分かる（気にさせてくれる）という長所があります。

著者は、「はじめに」で、「『哲学探究』を、一人で読んでいくのはとても骨がおれる。最初は、とにかく何をいっているのか、さっぱりわからない。何が問題になっているのかが、そもそもわからないのだ」（pp3）と告白していますが、哲学書とはまさにそういう本なのでしょう。そういった哲学書を哲学者はどのように読んでいるのか、本書はそれを垣間見させてくれます。一言でいえばそれは、一字一句おろそかにしない、隅々まで理解し尽くすといった読み方です。およそ常人では不可能と思われるほどの深い読み込みですが、それを疑似体験できる（ように感じられる）ことも本書の魅力です。

本書は、『哲学探究』について丁寧に、分かりやすく書かれた入門書ではありますが、それでも最初に読むウィトゲンシュタインものとしては、程度が高いように思います。

本書は、次の 4 章構成です。

第1章　語の意味とはなにか（1-6 節）

第2章　言語ゲーム（7-32 節、抜けあり）

第3章　語の意味とは、その使用である。（38-71 節、抜けあり）

第4章　私的言語（243-258 節、抜けあり）

1 章から 3 章がひとまとまりになっていて、この 3 つの章は「語の意味とはなにか」という問いが提出され、「語の意味とは、その使用である」という答えが出されて完結するという構造になっています。この構造に沿って、ここでの主張を思い切って要約してしまえば、次のようになると思います。

私たちは普通、言葉には意味があると考えています。例えば、犬という言葉は動物の犬を意味するというように。しかし、犬という言葉は、動物の犬以外にも犬死、警察の犬（回し者の意味）など様々な意味を持っています。また、地域や時代によっても変化します。つまり犬という言葉の持つ意味は、絶対的・先験的に決まっているのではない。そうではなく、犬という言葉が実際にどのように使われているかを観察し、そこから共通項を抽出することで決まるのだ、ということだと思います。意味が先にあるのではなく、使用が先

にあるという考え方でしょう。意味が先にあるというのは、辞書を片手に外国語を学ぶイメージ、使用が先にあるというのは母国語をしゃべるイメージです。我々も普段何気なく使っている日本語の意味をあらためて問われた場合、その言葉をどのような文脈で使っているかを思い返すのではないでしょうか。

これに関連してもう一つ、本書から私たちの盲点をついた指摘を挙げてみます。通常、言葉にはその対応物が存在していると考えます。確かに、犬、机、花などの言葉であればそのとおりなのですが、これを友情、概念、無限、神などの言葉にもそのまま拡張してしまい、友情、概念、無限、神といった実体が存在しているように思ってしまうという指摘です。

筆者の要約に芸がないせいもあって、何か当たり前のことのようにも思えてしまいますが、これらの洞察は、それまでの論理学の前提を大きく覆す考え方で、いわゆる「言語論的転回」の嚆矢となったそうです。

本書ももちろん、これだけではなく、言語ゲーム、家族的類似性、私的言語、表層文法・深層文法などのウィトゲンシュタイン哲学の超重要概念についても説明されています。

なお、「語の意味とは、その使用である」というテーゼとぴったり対応するテーゼとして「考えるな、見よ」があります。著者は、「考えるな、見よ」とは、「語の（本質的な）意味を考えるな、その（具体的な）使用を見よ」ということになるだろうと解説しています（pp199）。「考えるな、見よ」は、冒頭に書いた「語り得ぬものについては沈黙しなければならない」と同じように一種の箴言的な読み方もできます。このような言葉が頻出するのもウィトゲンシュタインの大きな魅力でしょう。

本書は、『哲学探究』に依拠しつつも、その全体が著者の中村の思索の結果とも言えますが、『哲学探究』を離れて著者自身の思考そのものが出てくる箇所が幾つかあります。例えば、言語とその対象物との対応について考察する中で、数字の表記について、「1257」と「1」を比べる、「1257」の方が空間的広がりから数が大きいことが分かり、10 進法の桁というのが見事な表記法であることが理解できるとした上で、「もし、1 をたとえば「1111」であらわし、1257 を「7」であらわすような記号法を想定し、それを現在のアラビア数字と比べれば、その異様さが際立つだろう」といいます（pp92-93）。確かにそのとおりで、よくこういうことを思いつくものだと感じた次第です。こうした部分も本書の価値を高めていると思います。

この拙文のために今回再読しましたが、A クラスの評価は変わりませんでした。ぜひ続編を読んでみたいと思わせる名作です。

意見に係る部分は、筆者個人の見解です。

橋本　武（一般財団法人日本開発構想研究所・研究主幹）